

同期吉川君の kindle 本が続々出版されており、その宣伝文を同期会に送付したところが、事務局長の曰く、何人からも聞くのだけれど、あれは使いづらい、ダメだと言ってる。もし使っているのなら具体的にその良さを示せと。版元自身の反論も職人の一徹で宣伝は苦手のようなので、多少の使用歴から若干披露、宣伝しても当方に何の利得もない。便利だから使うのみ。(今のところの重大「[トラブルと批判](#)」はこちらの末尾参照)

1 <利用デバイス>

どんな機器で読めるのかということなのだが、アマゾン当初から kindle 専用リーダー (端末機) を発売して、あたかもそれが無ければ利用できないような誤解を黙認していたのではなかったか。私はネットから取り込めば当然読めると理解、手持ちのアンドロイド・タブレットに kindle アプリをダウンロード、枕許での床読み専用機とした。ベッドに固定する Z 型のアームに装着すれば、昔の書見台。足腰立たなくなっても寝たまま書物発注・読書三昧、布団の中の指一つで操作できる無線マウス等もあるはずだ。

持ち歩き用タブレットにも、またスマホにも、そのうち PC 用 kindle アプリもあると判って据置き PC にもダウンロード。こうして、一度 kindle 本を取りこめば、どのデバイスからも読めることになる。しかも、どれで開いても直近で読んだ箇所からすぐ読み始めることが可能。家と外、何処に移動しても読書が持続 (勿論、本を持ち歩けば、同じことなんですけどね。ただし弁慶の七つ道具どころではないその膨大な量から言えば、これは持ち運び可能な私設図書館とさえ言える)。

2 <読みやすさ>

kindle 専用機は特殊画面で文字の黒が鮮明と宣伝されたが、初発機はネット上のアプリをタブレットのようには使えず、読書専用機として使いたい知人に進呈した。その後、幾台もタブレットやスマホを買い替えたが、新しい身体に次々と乗り移る憑依体のように、kindle 本はそれらに乗って量的拡大を遂げていった。

電子本を読みつつネット検索が並行して出来る利便性のため、専用機の宣伝に乗ることはなかった。ただしそのうち、専用機の方の機能がタブレットに次第に近づいて来たようなので、型落ちした安い専用機をヤフオク等で求め、風呂トイレ読書用に使っている。ネット検索や Gメールなども、いつの間にか、ある程度は使えるレベルとなっている。

問題の読みやすさなのだが、どのデバイスで使おうと、文字の大きさや書体、明度は勿論、床読み用では白黒反転させ、照明は消して読書。これは視覚障害を持つ方で読書機器の画面が眩しすぎる人の為の機能そのものという感じ。光量が圧倒的に下がるので眼の疲労度が減る。勿論コントラストも疲労には関係する。大型画面の PC では、ページの背景にして文字を大きくして読む。眼が疲れたら音声朗読機能で読み上げて貰う。

3 <検索・辞書・ハイライト>

電子データゆえ検索機能は重宝。『源氏物語』ほどの大部の本の全体から特定語彙を探し当てることも当然簡単。(かつて、kindle が出る前だったが『[白鯨](#)』の中で [coffee](#) という単語を探すのに WEB 版 “MOBY DICK” を検索したことあり) 特定箇所をネットに移って検索参照できることは読書時には必須。辞書機能もその一部、邦語辞書の他、幾つか外国語辞書も無料ダウンロードして使用可能。数色の色付けハイライト、傍線代わり、葉機能も使える。

4 <コンテンツ>

どんなに使いやすく読みやすくても、問題は、どんな本が読めるかということが最大の関心事。kindle 本を最初使い始めた時は、邦語作品の著者没後五十年以上の、著作権の切れた ¥0 の本。これは「青空文庫」(これ自体電子ブックの、日本では走りのヒットサイト。ただし誤植の多さは否めない) からの転用が主だろうが、中々貴重な本が無料で読める。書籍版で持っている本でも、書棚を探すより、検索して出てきたものをすぐその場で読めるのは有難い。

内外の作品集や全集もの等も、¥100 前後から買えるものが多い。高くても数百円 (程度に決めている)。ちょっと参照したり読み返す場合でも、書棚や堆積本から探すよりも随分手取り早く読め、元に戻す必要もないのは大変助かる。要するに、ものぐさ読書家を支えてくれる優秀な秘書とも言える。

外国語の作品集や全集ものなども、アマゾンで検索した後、kindle 版を見ると十分の一程の値段だったりして、お買い得感も高く、嬉しい。スラスラ読めずとも、上記の辞書機能がある。読者数が多い本などは初めから行間に時々逐語訳。これは、鬱陶しい場合は単語レベルを上げたり消したりもできる。雑誌、コミック、絵画集、写真集などもあるから利用範囲は随分と広い。

5 <収録冊数>

「一万冊」という触れ込みはよく知らないが、この十年ほどで溜まった冊数は（サンプルで読んだものも入れると）1263 冊（という数字も一瞬でわかるライブラリー・リストを表記できる）。

京の五条の橋の上の武蔵坊弁慶は、何もそんなに沢山の道具を背負わなくてもよいのに、と思うけど、いつでもどこでも好みのアイテムを取り出すことの出来るそのことに、彼は安心を覚えているのだろう。優雅に笛を奏でる牛若の、武器も持たぬ身のこなしに、あっさり負ける彼を思うと、沢山背負っていることには何のメリットもないことを思わされるから、この kindle の冊数だけの宣伝はあまり意味もない。

必要なものがサッと取りだせて有用性を発揮し、満足ゆく解決が出来ること、これが勝負でもあり読書の醍醐味だ。書籍版も電子版もない。当方の書籍群は、引越越しと地震と堆積とで特定の書物の探索が非常に困難となっている。そんな時、それが kindle にあれば大変助かる。

6 <洋書講読に於ける kindle までの前史>

① 丸善注文

控えデータ又は書店常備の分厚い数冊の INDEX で注文、送料もレートも高く、到着に数ヶ月掛かる。

② カタログ取寄せ直接注文

銀行で各国通貨のチェック作り、手紙で郵送、取次店マージンはないものの、やはり数ヶ月。

③ ネットで読める WEB データ版

各種文学叢書、図書館データ等無料で利用可能。クラシックな図書文献に限られるが、充実。

ようやく日本でも近年、古典文学等の分野では開発始まる。

④ 電子本作成・販売が近年一挙に進む傾向あり。個人でもドキュメント・スキャナーの利用可能。

メルカリでは、電子版にした後の裁断した書籍本の残骸が沢山出品されており、無残な様相を呈している。

7 <“kindle” という意味>

アマゾン社が販売する電子ブック端末と、その陳列する電子ブックの名称だが、本来 kindle という単語は、candle（キャンドル）とも語源を同じくする「火を点ける」という意味。“kind”には「親切な」という意味だけでなく、“birth”の意味があるから、“kindle”には実際「(兎などが) 仔を産む」という意味も派生。

総じて言うなら「キンドル」とは知識の火を灯すと云う意味を中心に持ちつつ、親切にも多産なウサギのようにはびこり、燃やし、又、人を焚きつけ、扇動するという意味にも敷衍する。人間が開発したものである以上、使う個人が自ら充分気を付けて管理運営利用しなければ危ういものだという点で、これまでに人間が創り出して来た他の道具類と基本は変わらぬ「便利なもの」という、当たり前の結論を確認、あらずもがなの「電子ブックの効用」の一節を終える。

8 <蛇足>

いくら電子ブックが便利であろうと、どこに埋まってしまったか見つけ出しにくかろうと、書籍体の本は、我が愛してやまぬ宝物である。手に取り愛でて、日に焼け、表紙も取れたり埃も積もったりし、我が亡き後は、いずれ古本紙屑となるにせよ、此の世に形あるものとして生まれ、いずれ又人の手に渡るか、熱と二酸化炭素に変化して虚空に消えてゆく…物質として立派に正しく終わるさだめは美しい。

もしも生きているうちに氷河期となったなら、下着と上着の間に詰めたり、燃して暖も取れる。昔の漉いた和紙で作った大蔵経は、飢饉の際、裂いてちぎって紙餅として搗いて食べたのだ。仏の言葉を記したお経は、文字通り人の命を救った。電子データでは、頑張っても食べられない…。電源が落ちれば画面も開かない。

少しは本を処分したら…との家人の声をよそに、日々、本が届く。図書館受取返却の為のウォーキングも欠かさない。眼と手足と頭は何とか暫く保全しておきたい。

(2022/12/16)